

巻頭言

2008.11月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

心を決めて、受験にのぞむ。

茗溪塾塾長 宇野 雅春

受験というのは、後で思い出すと、ほろ苦い思い出だったり、嬉しい思い出だったりするものです。しかし、受験の最中というのは、なかなか思ったような成果が出なかったり不安に駆られたり、気持ちが不安定になったりで、どちらかという辛いことが多いと思います。受験には倍率というものがあるので、全部の人がハッピーエンドで終わるわけではありません。合格か？不合格か？の結果を待っている間に、人は色々なことを考えます。例えば合格したら、明日から遊べるとか、受験勉強が終わって解放されるとか...たいていの人は楽で楽しい方向に物事を考えるはずですが、でもそんな風に考えている人ほど、合格を逃します。というより、甘いことばかり考えている人ほど、それほど勉強をしていないということなのです。倍率の高い受験になると、自分のレベルを上げきれないで、ただ希望だけを独りよがり考えているような人は、合格に至ることがまずないというのも実感です。11月の声を聞きましたが、自分の勉強をもう一度振り返ってみましょう。「弱い自分」が見え隠れするようなら良い結果は期待できないはずです。

私自身の経験の中で、勉強を非効率的にしていた大きな原因のようなことがあります。それは、自分ののんびりした性格にも起因していたと思うのですが、とにかく主体的に学習に取り組んでいなかったということです。例えば、最も不得意としていたのは社会科のような暗記科目です。まとめたりする作業勉強は全く苦にならないのですが、覚えようとか、『考えて』整理するというようなことが苦手なのです。テストの前日になるとその「まとめ」が間に合わなくて、一生懸命、覚えようとするのですが、もっと早くそうすればもっと覚えられたことは間違いなく、それでも結局は改善しないまま同じことを繰り返していたと思います。得意な数学や理科でも一度理解すればそれでよしということで、練習したり、更に効率的な解き方を身につけるなどということは考えもしませんでした。

つまり、勉強というのは、自分の気持ちの底からその気になって始めないと学習効果が得られないということです。月並みな言い方をすれば受験は「自分との戦い」です。自分が心を決めて取り組むことが、「最大効果」ということなのです。

受験はどんどん近づいてきます。受験生の皆さんはあれこれ思い悩むより、まず自分の心を決めて欲しいと思います。それなりに頑張っている生徒も「心を決める」ということ、つまり受験勉強を最優先にすることが大切です。受験は受験生だけではなくその周りも巻き込みます。家族も少なからず影響を受けます。家族も同等のリスクを背負っていることを理解しましょう。家族にとっても受験は大きな節目です。

数年前の年の瀬が迫った頃、電車の中でおばさんが2人大声で話していました。一人はお正月の準備が如何に大変かを話しています。暮れの大掃除から、正月の料理づくり、訪ねてくる親戚の多さなど話題は様々です。そんな話を聞くともなく聞いていると、突然もう一人のおばさんが大声で言いました。「うちはお正月はやらないよ...今年受験だし、よく言うでしょ？受験生に正月はないって」...その声は電車の中に大きく響きました。なぜか誇らしげで嬉しそうに私には聞こえました。

子供が頑張っていると親は嬉しい...私はそう感じました。あれこれの迷いを棄て、最善を尽くそう。精一杯の結果なら、その結果を受け入れない親はいないはずです。